

仏教語・雑談・三題

松田二郎

年がら年中、無然とした面もちを見せていた人が、以前よくテレビに映っていました。なぜか知らないが毎日不愉快な生活をしているのかな、だとすればかわいそうな人だな、と思っていました。だが、この人中国へ行く途端に破顔一笑、ニコニコしますし、中国政府の要人たちには受けがよいみたいなのです。

この人は、自民党の前幹事長二階さん。現在は表舞台から下りて、楽屋で沈黙しているようです。

私が二年前から「仏教語から日常語へ」という問題を意識しはじめたのは、この二階さんのおかげなのです。二階幹事長、いつも仏頂面してるな、ん？ 仏頂面ってどこから来たことばだ？「仏」があるから仏教語がからんでいるな。こんなふうにならなければ、仏教語大辞典やら国語辞典やらに向かい合います。すると、いろいろ面白いことがわかってきます。

仏頂は、お釈迦さまの頭頂（頭のてっぺん）。その毛髪か何かが化現して（形を変えてこの世に現われて）輪王りんおうの姿となり、仏法の正義によってこの世を治めるものを仏頂尊というそうです。この仏頂尊は、いかめしく恐ろしい顔をしているので、一般には不機嫌そうな、不愉快そうな、また不愛想な顔を仏頂面と言うようになったのです。「あいつはいつも仏頂面をしている」なんて言われたいようにしたいですね。

「化現」について一言。ご存知『西遊記』。天竺へ向かう三蔵法師一行の前にはしばしば魔物が現われて悪さをします。そんなときは、孫悟空、猪八戒、沙悟浄の出番ですが、相手が手ごわいとき、孫悟空は自分の頭髪を3本むっこぬいて、フツと息をかけると、自分と同じサルが3匹姿を現わし

て奮闘します。これが化現の一例です。

昨年8月、朝日新聞の川柳欄に次のようなおもしろい作品が載りました。俱利伽羅の紋々躍る五輪かな

昨年の夏、東京オリンピック、パラリンピックが開催されました。コロナ禍のせいで開催自体の賛否両論がありましたし、開催に漕ぎつけてもほとんどの競技が無観客でした。参加された選手の皆さんの無念さは、とても大きなものだったでしょう。その選手の皆さんですが、腕やほかの体の一部に入れ墨をしている方が案外多いと感じました。男性に多かったのですが、女性にも散見されました。

さて俱利伽羅というと、私は二つのことしか知りませんでした。一つは、現在の富山県と石川県の境にある俱利伽羅峠で、『平家物語』巻七にありますが、木曾義仲が平維盛の大軍を破った古戦場だということです。もう一つは、「くりからもんもん」で、背中の入れ墨や入れ墨をしている人、あるいはヤーさんを意味することばだということ。

俱利伽羅もまぢがいなく仏教語だと思い、調べてみました。俱利伽羅は、正確に言うと俱利伽羅竜王だそうです。この竜王は、忿怒の形相すさまじく、種々の煩惱や障害を焼き払ってくれる正義の味方不動明王（お不動さん）の化身です。不動明王と同じく火炎を背にした竜の姿になり、妖魔が手にする邪見の剣に巻きついてそれを呑み込もうとしています。紋は、紋様、模様、図柄ですね。

この俱利伽羅紋が日常語として使われると、背中に彫った俱利伽羅竜王の図柄の入れ墨、またその入れ墨をしている人を指します。さらに広げて、竜王の図柄にとらわれず、花柄でも鳥柄でも何柄でも入れ墨をしている人、とくにヤーさんを指すようになりました。

東京オリンピック・パラリンピックでは、クリカラ・モンモンがたくさん目につきました。しかし、この人たちは決してヤーさんではありません。いろいろな種目で活躍したりっぱな選手の皆さんです。私ごとき超ジジイには到底理解不能なのですが、入れ墨は今や世界中の人々の標準的な「おしゃれ」

なのでしよう。人の感性は自由であるべきですから、入れ墨を一概に否定するのはよくないと思います。

私は山登りならぬ山歩きが好きでした。金峯山は、頂上から眺望のいい尾根伝いに母狩山との鞍部まで歩き、そこに湧き出る清水でのどを潤すのは、何とも言えぬ楽しいものがありました。鳥海山には6回、月山には20回以上行きましたが、ヨーロッパの角と言われるマッター・ホルンの雄姿を、近くから遠くから一日中眺め歩きたいがために、スイスにも2度行つて来ました。

もう40年以上も前のことです。夏休みに妻と子ども3人を伴つて月山登山をしたことがあります。8合目から頂上を目指しましたが、小学生だった息子2人はどんどん先に行つてしまいます。私たち親はまだ幼稚園の年中さんだった娘を気づつかつてゆつくりと登つて行きます。先の方で岩に腰を下ろした息子2人が待っています。

このくり返して9合目を過ぎたあたり、白装束の6、7人のグループが私たち3人に追いついて来ました。私たちが「お先にどうぞ」という気持ちで道を通つたのですが、そのとき、グループの中の一人のおじさんが「坊や、えらいね、がんばれ、がんばれ」と声をかけてくれました。すると、娘すかさず「坊やじゃない、女だッ」。娘の抗議のことばが耳に届いたかどうかわかりませんが、おじさんたちは「サンゲ、サンゲ」と声を揃え何か呪文でも唱えるように登つて行きました。

そのとき「サンゲ」とは面白いことばだなと思いましたが、それ以上の興味もわかず、放つておきました。最近になつて仏教語を気にとめるようになり、「サンゲ」も仏教語ではないかなと思つて調べました。

やはり仏教語で「懺悔」と書きます。自分の犯した罪悪を神や仏に告白して許しを乞い、悔い改めることで、霊山に登るとき「サンゲ、サンゲ」と唱えます。これが日常語になると「サンゲ」と発音し、自分の犯した罪やあやまちを他人に打ち明けて許しを乞う場合に使います。

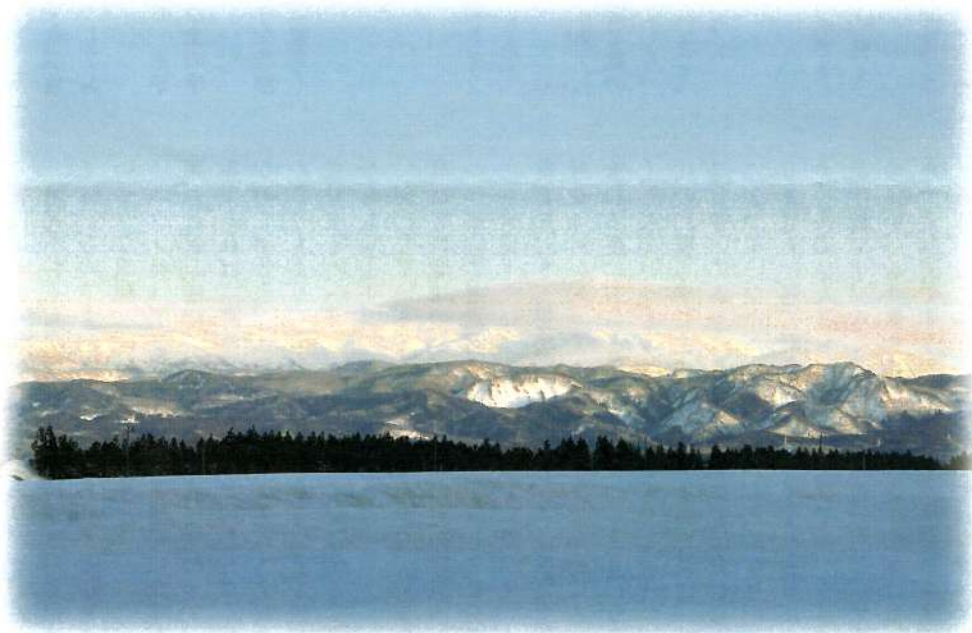
「お前の懺悔話は、もう聞き飽きた」

「彼は、懺悔はするが、改める努力が足りない」

などと言われたいようにしたいものです。

何とも思わず使っている日常語が、そのもとをたずねると実は仏教語だったということはたくさんあります。たとえば、道具や普請などのことばは大工さん用語かと思つていたら、これも仏教語でした。このことは、ある時代、仏教が民衆の日常生活の中に浸透していたことを表していると思います。

(2022・2・7 記)



2022年1月 黄金より望む月山